障害理解と障害観の育成についてⅠ

―保育士養成校の学生への調査から障害理解の程度とその変化について把握する―

八　田　清　果

Understanding disability and growing the view of disability Ⅰ

— Comprehending the degree and the change of disability understanding, from the reserch among students at a nursery teacher training school —

HATTA Sayaka

キーワード：障害理解、障害観、保育士養成、施設実習、障害児保育

１．研究目的

近年、学生の実習報告等からも保育所にも障害を持つ子など対応が難しい子どもたちがいることがわかっている。また、障害児保育も保育士養成課程においては必修となり、施設実習先には障害児だけでなく障害者施設も含まれるようになり、より障害に関する知識や理解が求められるようになってきている。そうした中で、保育士養成校の学生つまり今後保育士になっていく学生の障害理解や障害観はどのようなものなのか、そしてそれをどう育成していくべきなのかを考えた。

保育士養成校の学生における障害児・者理解に関しては、坂下晃祥（2009）[1] は障害者をどのように説明するかという視点から、柳澤亜希子（2006）[2] は障害のある人々との接触経験と障害理解との関連性という視点から、隣谷正範（2013）[3] は実習前後を通した知的障害者に対する捉え方という視点から研究を行っている。また、八田清果・大下二三子・金森由華（2014）[4] も保育者養成校で学ぶ学生の障害児・者施設のイメージの形成に何が関連しているのかという視点から、保育士養成校の学生が障害児・者施設に抱くイメージとのギャップの解消方法について研究を行っている。

そうした先行研究を踏まえ、八田清果・大橋英子・小林美保子（2018）[5] は、保育現場における障害理解を深めるための体制・システムについて、「発達支援・特別支援の研修制度及び体制」という視点から調査（2016 年度 12 月実施）をし、その結果分析から、障害に関する研修については、職位や公立・私立園で研修参加への差がみられることも明らかにした。さらに、そうした現状がありながらも、現場からは、「全職員が受けられるようなといったような現場に即した具体的な研修」が望まれていることも同時に明らかになっている。このように保育現場に出てからも職位等による違いはあるが、発達支援や特別支援、つまりは障害理解を深めるための研修が求められ、実際に行われていることがわかった。

こうした中で、将来、保育士となる保育士養成校の学生はどのように障害理解をし、そして、私たち保育士養成校の教員は、どのような障害観を育成すればいいのかという観点からの研究が必要であると考えた。つまり、障害に対する「視点」をどう持つのか、そして、障害に対する「視点」作りのために何をすべきかを考えるための研究である。

そのために、まず、保育者養成校の学生が現在、どのような障害理解をしているのかを把握する必要がある。

水田敏郎（2015）[6] は、テキスト冒頭のはじめ

において、「『障害児保育と乳児保育は保育所保育の基本である』とも言われている。その理由は、保育者は障害のある子どもの保育を実施する際、１人ひとりの発達特性の差異をとらえ、対象児の興味・関心の範囲を把握したうえでどのような経験が必要かを熟慮して接するが、このことは発達の著しい乳幼児に対する保育においても同じ姿勢が求められる点にある。こうしたことからも、障害のある子に向き合う保育者には、その基本的な資質がとわれることにもなる」（水田 2015：p. ⅱ）とし、また、授業への向き合い方についても「実際の子どもたちとの触れ合いが絶大なる教育力を持つと実感させられる」（水田 2015：p. ⅲ）とあるように、保育所保育の基本である障害児保育の授業への向き合い方も実習で実際に障害のある子どもや大人と触れ合うことでより前向きになることを指摘している。つまり、施設実習を行うことの意味は、授業内で学ぶ以上の経験をしてくることにある。経験したからこそ、学ぶ意欲が強まり、意識が高まる。施設実習に行くからこそ、障害児保育等の学びが深まり、その深まりこそが、保育所保育を行う上でも大切な経験であり、考え方の深まりを生むということである。

そう考えたとき、障害のある施設で実習をし、そこで学生自身が感じてくることは、保育士としての基礎を作ると言っても過言ではないと思うのである。

障害理解や障害観をどう育成するのかを検討するにあたり、今回はまず障害児保育や施設実習に行く前の段階と行った後の段階で学生の障害への理解や障害観に変化はあるのか、あるとしたら、どう変化したのか現状を明らかにしたい。

２．研究方法

＜アンケート調査＞

保育者養成校の学生の障害理解とその変化を把握するために自由記述によるアンケート調査を２回実施した。対象は、保育者養成校で障害児保育Ⅰを履修している２年生である。実施時期は、前期授業開始初日の４月と施設実習終了後であり授業最終日の８月末である。４月時点での調査では57名、８月末時点での調査では58名から回答を得た。２回のアンケート調査の自由記述の内容をカテゴリー化し分析を行った。

＜インタビュー調査＞

学生の障害理解の背景等をより詳細に理解するため、許可を得た学生についてはインタビュー調査も行った（対象は４名）。こちらについては、半構造化インタビューの手法を用い、対象者の承諾を得たうえで録音もさせてもらい、その発言内容から分析を行った。

３．研究倫理に対する配慮

調査にあたっては、小池学園研究倫理規程に基づき、事前に目的、結果報告の方法等を説明し、了解を得てから調査を実施した。その上で、結果の公表に際しては、個人が特定されるようなことのないようにし、個人情報保護法および本学個人情報保護方針に基づき、個人情報を保護するとともに情報漏洩の防止に十分配慮する。

４．研究結果

（１）アンケート調査結果

１）２年生４月時点の調査結果

２年生の４月に調査した結果である。２年生の４月というのは、障害児保育Ⅰの授業も始まっておらず、保育実習Ⅰ（施設）もまだ行っていない段階である。

アンケートでは、「障害」や「障害者」と聞いて、どのようなことをイメージし、どう感じるかを質問し自由記述式で回答してもらった。その記述内容からカテゴリー化分析した結果が、図１である。図１を見ると、「普通の生活ができない・生活が大変」のカテゴリーの学生が11人で最も多く、次いで「わからない・怖い」が７名、「怖い」のカテゴリーの学生が６名となった。

学生の回答の多かった「普通の生活ができな

い・生活が大変」、「怖い」、「わからない・怖い」というカテゴリーについて、学生の記述した言葉からもう少し詳細にみていく。すると、「普通の生活ができない・生活が大変」と感じる学生の多くが、「一人で生活できない」、「援助が必要」と感じており、だからこそ、普通ではない、大変だとしていることがわかる。また、「怖い」については、「大きな身振り手振り」に怖さを感じたり、「急に大声を出す」など予想できない動きをすること等に怖さを感じているようである。さらに、「わからない・怖い」と回答した学生の記述を見ると、「接したことがないのでわからないから怖い」、「どうかかわっていいのかわからないので怖い」等、今まで障害のある人とかかわったことがないからこそ、わからないから怖いと感じている様子がみえてくる。

これらのことから考えられるのは、こうしたイメージの背景には、学生自身が今まで障害のある人とかかわった経験がない（または少ない）ことがあるのではないかということである。これは、記述の中で、障害のある人が身近にいると明記されたものは、「おじ」「弟・同級生」「友だち」「アルバイト」の４名だけであることからも推察できる。かかわったことがないから「わからない」し「怖い」と感じる学生もいるのではないかと考えられる。

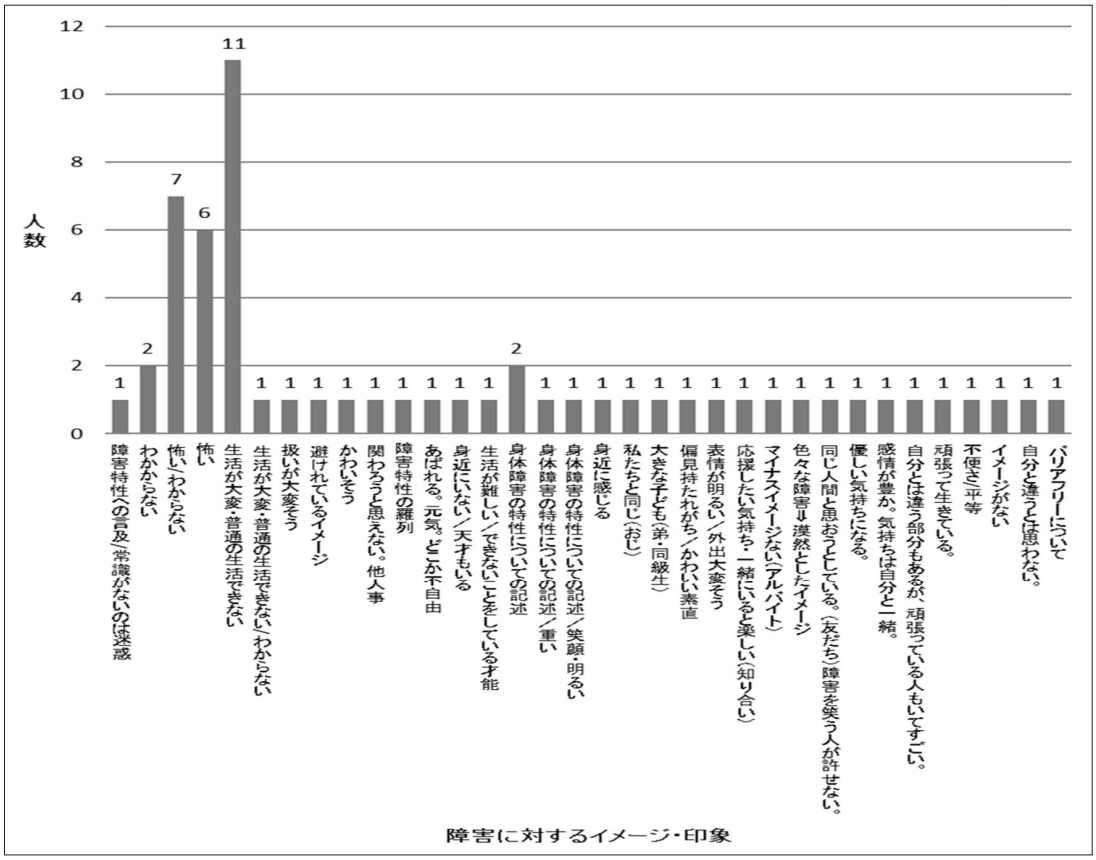
また、４月の調査結果での記述を見ていくと、「自分とは違うとは思わない」、「私たちと同じ」としたものがそれぞれ１名ずついた。しかしながら、「生活が大変・普通の生活ができない」のカテゴリーでの回答が最も多かったことからもわかるように、障害のある人の生活は普通ではなく、自分とは違うといったようなどこか他人事のような印象を抱く記述が多くあった。

２）２年生８月時点の調査結果

図２は、２年生の８月末に調査した結果である。２年生の８月末というのは、保育実習Ⅰ（施設）が終わり、障害児保育Ⅰも 15 回の授業が終了し

図１：４月時点での障害へのイメージ・印象についてのアンケート調査結果

（n = 57）



た段階である。アンケートは自由記述式で、その内容からカテゴリー化した結果から分析する。

ちなみに、表１は、今回調査対象とした学生が履修した障害児保育Ⅰの授業計画である。また、保育実習Ⅰ（施設）においては、全ての学生が障害に関わる施設に行ったわけではない（表２参照）が、保育実習Ⅰ全体報告会や保育実習指導Ⅰ（施設）の授業内での実習体験報告を通して、障害児・者の施設に行った学生の体験談を全員が聞いている。

図２を見ると、「普通・自分と同じ・みんな同じ」（17名）、「怖い・偏見がなくなった・減った」（８名）、「障害は個性」（４名）というカテゴリーが、今回の調査結果では多くなっていた。特に、「普通・自分と同じ・みんな同じ」のカテゴリーは17名と最も多くなっている。４月時点での調査では、「自分と違うとは思わない」、「私たちと同じ」がそれぞれ１名しかおらず、逆に「生活が大変・普通の生活ができない」が最も多い11名だったことから考えると学生自身の障害に対する考え方や印象が大きく変わったことがわかる。自由記述の内容を見ていくと「同じ人間には変わら

表１：2019年度障害児保育Ⅰ授業計画（30年度生）

回	テーマ
1	障害児保育の基本（現状と歴史）
2	障害理解①自閉症
3	障害理解②知的障害
4	障害理解③肢体不自由
5	障害理解④障害・介助体験（移乗体験、車いすの使い方等の体験）
6	障害理解⑤障害・介助体験（食事、着脱の体験）
7	障害理解⑥注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）
8	障害理解⑦視覚・聴覚障害児等
9	障害理解⑧重度重複障害・情緒障害
10	障害理解⑨医療的ケア児等
11	障害理解⑩その他特別な配慮を要する子ども／振り返りの小テスト
12	合理的配慮の基本
13	合理的配慮の実際
14	障害児保育の実際①個々の発達を促す生活や遊びの環境
15	障害児保育の実際②子ども同士のかかわりあいと育ちあい／振り返りの小テスト

図２：８月末時点での障害へのイメージ・印象についてのアンケート調査結果

（n = 58）

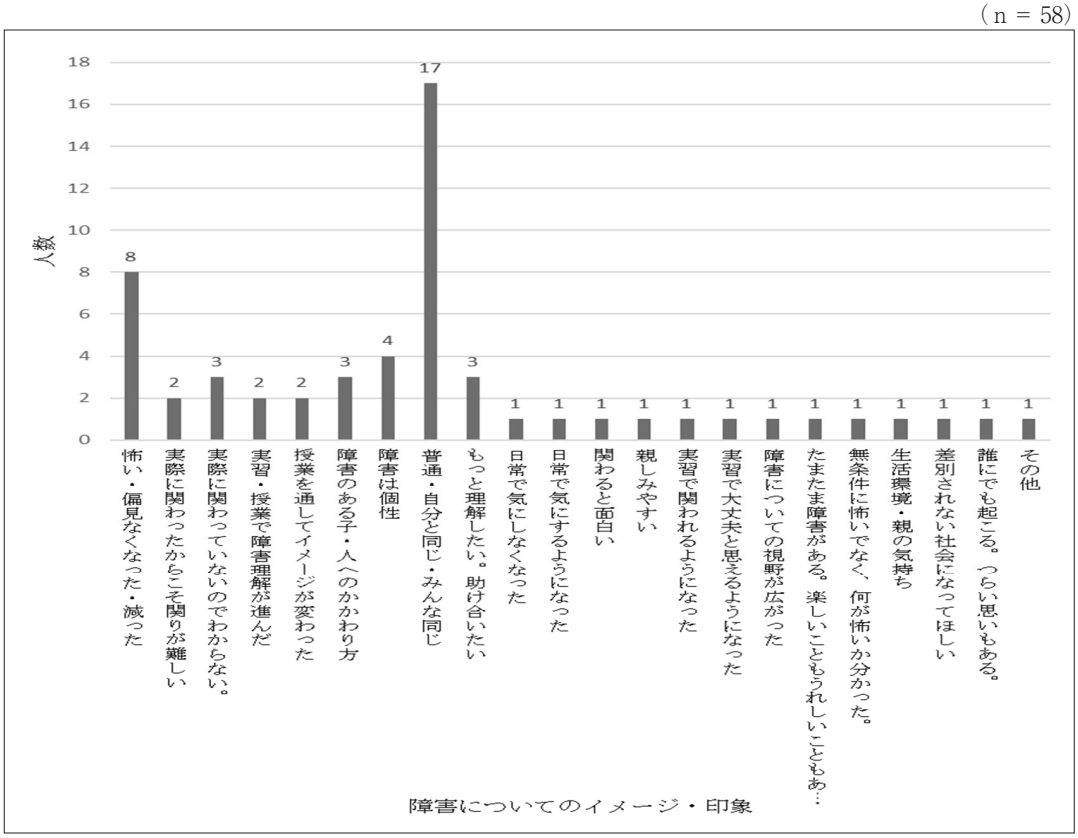


表２：2019年度保育実習Ⅰ(施設)実習先種別数と学生配属数一覧

実習先施設種別	施設数	学生数
養護系＊[1]	9	16
障害児（入所）＊[2]	3	6
障害児（通所）＊[3]	3	3
障害者（入所）＊[4]	14	26
障害者（通所）＊[5]	9	11
合計	38	62

＊１：乳児院・児童養護施設
＊２：福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設
＊３：児童発達支援センター
＊４：障害者支援施設、重症心身障害児者施設・療養介護等
＊５：就労継続支援Ｂ型、障害福祉サービス事業所、多機能型事務所等

ない」「何も変わらない」「考えたり思ったりすることはみんな同じだと思いました」「私たちと何もかわらないので、ただ少しみんなより苦労するだけ」等障害があっても自分と変わらない、同じだという認識を持った学生が多くいたことがわかった。

３）４月と８月末の調査結果の比較考察

４月時点での調査結果（図１）と８月末時点での調査結果（図２）を比較すると、「怖い」と感じる学生が減り、また、「普通の生活ができない」等と感じていた学生たちが、「自分と変わらない」と感じるようになっている様子がわかる。また、ここの図１、図２には記していないが、４月の段階では多くの学生は「障害者」「障害の人」と記述していたのだが、８月末の調査では「障害のある人・方々」等の記述が多くなり、障害者を指す呼び方（書き方）にも違いが見られるようになっている。また、記述そのものにも温かみを感じる書き方が多くなっていた。こうしたことからも、学生たちの障害への見方や障害のある人への理解が深まったことがわかる。

（２）インタビュー調査結果

アンケート調査からだけでは見えてこない、学生の障害理解への変化やその背景について把握するため、４名の学生に２回の半構造化インタビュー調査を実施した。インタビュー実施時期は、１回目が１年生２月～２年生の４月、２回目が２年生の10月～11月である。アンケート調査と同様に、障害児保育Ⅰや保育実習Ⅰ（施設）履修前と履修後に行った。

インタビュー対象者の概要は表３のとおりである。インタビュー調査に協力してくれたＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの４名の概要を見ると、何らからの形で障害のある人とかかわっては来ているようだが、Ａを除き、高等学校までのボランティアや学校行事等でのかかわりで、深くかかわるような経験はないようである。また、保育実習Ⅰ（施設）においては、４名とも障害系の施設に実習に行っている。その後の実習選択では、２名が保育実習Ⅱ（保育所）、２名が保育実習Ⅲ（施設）へとわかれている。

表３：インタビュー対象者の概要

A	保育実習Ⅰ（施設）では児童発達支援センターに行き、保育実習Ⅲ（施設）を選択し、就職先も施設系である。障害のある人とのかかわりは、グレーゾーンくらいの人や児童館のボランティアや高齢者、施設のボランティア等。
B	保育実習Ⅰ（施設）では児童発達支援センターに行き、保育実習Ⅱ（保育所）を選択し、就職先は保育所系希望である。障害のある人とのかかわりは、ボランティアで少しかかわったくらい。最初は怖かったが、一緒にいると慣れたそう。
C	保育実習Ⅰ（施設）では障害者就労支援施設に行き、保育実習Ⅲ（施設）を選択し、就職先は保育所系である。障害のある人とのかかわりは、小学校の時友達、高校時代には通学路に学校があり挨拶する程度の仲の障害のある子がいた。また、友だちで聴覚障害の子もいたとのこと。
D	保育実習Ⅰ（施設）では障害者就労支援施設に行き、保育実習Ⅱ（保育所）を選択し、就職先は保育所系を希望している。障害のある人とのかかわりは、高校で、同じ年齢くらいの特別支援学校の子とのレクリエーションをしたくらいとのこと。

インタビュー調査ではいくつかの質問をしたが、ここでは、「障害／障害児・者についてのイメージ」、「支援について」の２点から比較考察をしていきたいと思う（表４、表５参照）。

１）障害／障害児・者についてのイメージ

インタビュー調査の内容から「障害／障害児・者についてのイメージ」について比較した表が表４である。１年次２月～２年次４月に実施した１回目のインタビュー調査では、「不自由がある」、「電車とかで見るが接し方がわからない、怖い」、

表４：障害／障害児・者についてのイメージ

学生	インタビュー調査１回目 （実施時期：１年生２月～２年生４月）	インタビュー調査２回目 （実施時期：２年生10月～11月）
A	健康な人と比較して多少、普段多くあっている、健康と言われている人と比較して、比較するといってもどこまでを障害の切れ目っていうか、例えば発達障害とかだと、どこまでが発達障害なのか、発達障害傾向の人って聴覚とか過敏っていうが、それがどこまでがそれをさすのかわからない。自分の中のイメージだと、どっからどこまでかわからないが、一般的にできるといわれることが少し不自由がある。 軽度だと個性すごく輝いている面もある。意思表示の大変な人もいる。でも、あまり違いは感じない。	抽象的だったものが具体的になってきた。専門職としての視点が入ってきて大変さを感じる。援助するにあたっては理念と現実のギャップを感じる。実習に行って具体的になった。実習では、対応にしても「指導的にならないようにしよう」と思っていたが、場合によってはそうしなければならないこともあると感じた。例えば、機能訓練等子どもが泣き叫んでもしたほうがいいこともある。短期的な子どもの意思（したくない）を尊重するより、長期的にみるとやったほうがいいということもある。 演習とか体験的に学べる授業や実習で考えが変わった。実習では、実際に子どもにかかわって、できることが少ないことに気付いた。
B	発達支援が多い。電車で大きな声を出すとか。 子どもはびっくりしない。大人はわかっていてもびっくりする。接し方もわからないし、何をしちゃいけないかとか不安。	児童発達支援センターに実習に行って、電車に乗れるようになるまで発達過程について気になるようになった。幼稚園実習は母園で、自分が通っているころから障害のある子がいたが、実習に行った時も結構重い子がいた。自閉症？クラスに入るのと療育に行くのとどっちがいいのか疑問に思うことが増えた。
C	24時間テレビに出てるけっこう重い子どもたち。子どもたちが大人になっている大人。老人系の障害だったり、若い人でも迷子になっちゃったりとかが、パッと浮かぶ。	個性が強い。できないことも多いかもしれないが、得意を増やしている。障害でも大人と子どもとでは違うと思った。今まで、テレビで見ている感じとか、幼稚園や保育園でもグレーな子どもたちを他の子と比べて違うなと思ってみていた。今回、施設（放課後デイ、障害者支援施設）に行ってみて、そこにいる人たち（多くは大人）はものすごく違うという感じがしなかった。我慢することの積み重ねとかできないことをできるように努力している姿とかをみて、大人の人はこうして今があるのだと思った。大人でも年齢の高い人はより我慢強いところがあって、大人でも違うと思った。実習で小学生くらいの子、高校生とみて、子どもたちも成長する姿も見られるが、ゆるやかと感じた。
D	車いすに乗っている。ヘルメットみたいのをしている。体が不自由。松葉づえを使っている。	今までは援助してもらわないといけない人と思っていたが、実習に行ってみて、手助けすれば自分でできることがわかった。実習では、利用者さんに教えられることも多かった。いろいろな人に出会い、話を聞いたりして面白かった。自分のやりたいことが多いと感じたし、仕上げは職員にしてもらっていたが、髭も自分で剃ったり、思っていたよりも自分でできることがたくさんあると思った。

表５：支援について

学生	インタビュー調査１回目 （実施時期：１年生２月～２年生４月）	インタビュー調査２回目 （実施時期：２年生10月～11月）
A	自立に対する支援。やりたいことがあるが社会とつながれない、社会と接点が持てなかった。その人の興味関心に寄り添い、伴奏するような、希望に添うような支援。無条件の愛情を受け止めたい。	授業で、発達障害のポータルサイト的なものがあることを知った。そういう直接的な支援より後方的な支援的なこと、つながりを作るじゃないが、そういうことができるかなと思った。「希望に添って」と言ったが、前は希望があってそれに何かを足せばいいと思っていた。だけど、希望そのものというか将来とか、難しさを知った。試してみないと思った。一定期間関わってみないとわからないし、他の人の意見を聞くことの大切さもわかった。自分に示す希望と他の人に見せるものが違うかもしれないから。 施設の方から「自分でできることも大切だけど、職員の人がやってあげた経験も大切」と聞いて、愛情を詰めてからじゃないと自立支援もないんだと感じた。
B	思い浮かばない。実習では知識を入れてから言動に気をつけたい。制作を見てみたい。	障害がある人について前は「自分とは違う」イメージがあり、何をしていいのかわからなかった。見守ることも必要だと実習に行って学んだ。しすぎないこと。支援とは違うかもしれないが、変な目で見ないように小さい時から障害のある子とかかわるようにすることが大切だと思った。だから、そういうかかわる機会がつくれればいい。
C	何か、普通に、健康そうに見える、実はあんまり話せないとか聞こえないとかの人には軽い手話とか口元をしっかりはっきりしたりとか、なんかきれいな字でさらさらっとかけたりとかスムーズにできたらなと思う。ちょっと重い人には、その人の介助ができるといいけど、家族のサポートができるのが、いいんじゃないか。今私ができるサポートなんじゃないかなと思う。	子どものときにいかに療育をするか、その大切さを感じた。二次障害の出方が支援の仕方によって異なると思う。学校へ行くだけの子と放課後デイサービスに行っている子とは成長が違うと思う。異年齢の子と関わる機会を作ることは障害のある子にとってもいいと思った。親や本人だけでなく、きょうだいへの支援も大切だと思った。相談しやすい環境づくりとして、イベントとかきょうだいも施設に来やすいように環境を作り、職員とかとかかわりやすくすることも大切だと思った。実習に行って、授業と実際の姿が結びついた感じ。
D	道具とかいいものを与えたい、提供したい。お金でもいい。手当を充実したらいいと思う。自分ができるといえば、慎重にケガさせないようにするくらい。	ベッドとか安全とかに気を付けるようなものになったらいいなと思った。実習先は利用者さんに対してもすごく丁寧でお家のような感じだった。スヌーズレンとかいろいろな支援がされていた。また、利用者さんが楽しめるような工夫をしていたりもした。実習に行って勉強になった。

「テレビで見た」、「車いす」等と話していることから、具体的な「誰か」をイメージしたというより曖昧な漠然とした「障害」のイメージが述べられている。こうした曖昧さや具体性のなさは、テレビで見たことそのものや街中でのちょっとした触れ合い（見かけた程度）、つまり、４名とも深くかかわったことがないこと（表３参照）に起因するのではないかと推察できる。

では、保育実習Ⅰ（施設）や障害児保育Ⅰ履修後の２回目の調査ではどうだっただろうか。２回目の調査では、実習で実際に障害のある人や子どもとかかわったことで、「怖さ」や「わからなさ」といった曖昧さが消えている。それと同時に、かかわったからこそ、かかわりの難しさを感じたり、障害のある人や子どもの姿からその発達過程への興味といったことにつながっている様子がわかる。

１回目のインタビュー調査では「障害児・者」というよりは「障害」というものに対しての漠然としたイメージだったものが、２回目のインタビュー調査では、障害のある子ども・人といったように「障害」そのものよりも、障害もある「人」への興味関心のようなものが表現されているように思う。

２）支援について

インタビュー調査の内容から「支援について」を比較したものが表５である。１回目のインタビュー調査では、「希望に添うような支援」、「無条件の愛を受け止める」、「思い浮かばない」、「手話とか口元を見せる」、「家族のサポートとか」、「道具とか提供したい」等抽象的であったり、非常に限定的な障害特性を踏まえて（聴覚障害や車いす利用者等）の回答であった。

２回目のインタビュー調査になると、直接的支援で何をというより、障害のある人や子どもの周りの環境を含めた支援に目が向くようになっていることがわかる。また、直接的な支援に関しても、「何かをしてあげる」といったような支援から、見守ったり、その子の自立に向けた支援といったような将来を見通した支援の必要性を感じたことがわかる。

３）インタビュー調査のまとめ

「障害／障害児・者についてのイメージ」、「支援について」の２点についてインタビュー調査を１回目と２回目で比較してきたが、どちらのテーマでも共通しているのは、１回目は曖昧で漠然としたものであったことである。

しかし、２回目のインタビュー調査になると、出会った「人」を通して、障害やその支援について考えている様子がわかる。さらに、その支援についても、今何かをしてあげるという視点からの支援ではなく、その人の今後も含めて、障害のある人たちに何が役に立つのか等幅広い視野で考えられるようになっている。

５．まとめ

この２つの調査を通じて、保育士養成校の学生がこの半年間で大きな障害観の変化があったことがわかる。その背景には、障害児保育Ⅰでの授業の体験や学びもあるが、「実習で～」という言葉で記述したり、話していることからも実際に障害のある方とかかわったという経験が非常に大きく影響していることがわかる。このようなことから、学生一人一人が考える障害観（障害への見方）に関しては、障害のある人・子どもとかかわることが大きく影響を及ぼすことがわかった。これはつまり、学生がどう障害を理解するかということにもつながっていると考える。

インタビュー調査に応じてくれたＢの回答ではないが、「小さい時から障害のある人とかかわること」、つまり、障害のある人が当たり前に自分の隣にいること、同じ社会の中で暮らしていることが障害への理解を深める最大の策なのではないかと今回の調査から考えた。障害のある人もない人もともに当たり前に社会にいること（ノーマライゼーション）は、「障害児・者」といった「障害」というものから、障害もある「人」といった見方・考え方に変わるのではないかと思う。障害のあるなしにかかわらず、私たち一人ひとりは、同じ部分もあるが、違う部分もある。その極めて

当たり前のことに気付くことができたら、「障害児・者」といった括りで誰かを見るのではなく、その先にあるその人そのものを見ることができるのではないだろうかと考える。

調査を通じて見えてきたように障害のある人とのかかわりを通して、障害のある人への理解が深まり、障害観が変化した学生が多くいた。こうした学生が将来、保育士として保育園等で働くことで、その学生たちを通じて子どもたちに人への見方、障害への見方が伝わるかもしれない。時間のかかることかもしれないが、こうして少しずつ一人ひとりの障害理解が進むことで障害のある人もともに暮らすことが当たり前な社会がくると思う。保育士養成における施設実習の意味をしっかりと理解し、学生への指導へつなげていきたい。

引用文献

1）坂下晃祥（2009）「障害者をどのように説明するのか―保育者を目指す学生を対象とした調査による考察―」『花園大学社会福祉学部研究紀要 第17号』，pp105-118.

2）柳澤亜希子（2006）「保育者をめざす学生の障害に対する理解―障害のある人々との接触経験および障害理解教育との関連について―」『北陸学院短期大学紀要 第38号』，pp123-138.

3）隣谷正範（2013）「保育学生の知的障害者に対する捉え方の変化―障害者支援施設での施設実習を焦点として―」『松本短期大学研究紀要 第22号』，pp3-11.

4）八田清果・大下二三子・金森由華（2014）「障害児・者施設イメージに関する一考察―本学学生の施設実習前アンケート調査より―」『滋賀文教短期大学紀要 第17号』，pp55-67.

5）八田清果・大橋英子・小林美保子（2018）「『気になる』子どもの保育の現状と支援について―発達支援・特別支援に関する研修体制から考える」『学校法人小池学園紀要 第16号』，pp41-48.

6）水田敏郎（2015）「はじめに」『基本の保育シリーズ⑰障害児保育』，中央法規，ppii-iii.

参考文献

1）「知的障害のある子を育てた母の障害観―ICFによる質的分析から―」（2018）下尾直子著、生活書院

2）「障害児者へのサポートガイド」（2007）新井英靖編著、中央法規

八田清果　（埼玉東萌短期大学准教授）